

私がキリスト教を論ずる理由は唯一つ。この宗教が西洋人の魂を鍛へ、育て上げた事は紛れもない事實であり、世俗化の進展に伴い宗教的信仰そのものは衰へたと雖も、それによつて培はれた洋魂は今も健在、しかも世界は實質的に歐米諸國が取り仕切つてゐる以上、洋魂の理解無くして、西洋文化は勿論、實は國際政治や自然科学についてすら眞の理解は不可能である筈なのに、吾國では母胎としてのキリスト教を殆ど問題にする事が無く、表層の些事としか思へぬ事ばかり論じてゐる——かうした眞つ當ならざる現状を少しでも正したいからに他ならぬ。

### キリスト教の耐久力

以上と同じやうな問題、キリスト教の文明である。意識の下に書かれたクリスト教入門書を、ここ最近ちらほら目にするやうになつた。橋爪大三郎と大澤眞幸の共著『ふしぎなキリスト教』(講談社現代新書)もその一つである。大澤の質問に橋爪が答へるといふ対談形式の本書は今や三十萬部のベストセラーらしいが、インターネット上では既に著者たちの(特にプロテストアントである)橋爪の(基本的事實に關する)數多の誤謬と偏見が嚴しい批判に晒されてゐり、今後はそれと併せて讀む事が必要とならう。但し「まへがき」で大澤が述べてある次の事は間違つてゐない。

《西洋とは、結局、キリスト教型文明である。つまり、西洋は、世俗化してもなほかつてかキリスト教に根を持つてゐることが大きく効いてゐるやうな社會である。》

《いまある程度近代化した社會の中で、近代の根っこにあるキリスト教を「わかつてゐない度合ひ」といふのをもしIQのやうな指數で調べるこゝろで、日本がトップになるだらう。それは日本人が特に頭が悪いといふことを意味してゐるわけではなく、さうではなく、日本があまりにもキリスト教とは關係のない文化的傳統の中にあつたことがその原因である。》

これだけ世の中が進歩したのだから、何も今更

# 洋魂の素晴らしさを語りぬ

## キリスト教を抜きにして 米國際政治は語れぬ

早稻田大學准教授 岡田 俊之輔

近代合理主義が登場した段階で、宗教の生命は終はるのだ(『宗教なんかこぼさない』ちくま文庫)。これなどは正に「わかつてゐない度合ひ」の最高指數を示す發言と言つてよい。事はさう單純な話ではないのだ。何故なら「近代合理主義が登場して世の中が幾ら「世俗化」してもなほかつてかキリスト教に根を持つてゐることが大きく効いてゐるやうな社會」それが正しく西洋といふものだからである。キリスト教の耐久力をゆめゆめ見詰めてはならぬ。

「價值観を共有」は本當か

無論「わかつてゐない」のは知識人だけであらう。その點は政治家も同断である。日本の歴代首相は米國大統領との共同記者会見の場で、「日米關係は自由と民主主義といふ共通の價值の上に築かれ、云々」といつた類ひの聲明を度々發表して來たが、果して兩國はそのやうな價值観を本當に共有してゐるか。アメリカと共同歩調を取るための一種の政治的方便として述べるのならまだしも、本気でさう思ひ込んで「それが己れにとつて如何に掛替への無いものであるかといふ切實感に於ては、所詮同日の談ではないのである。謂ふならば歴史の宿命の然らしめる違ひなのだ。」

パリ在住のカトリック史研究者・竹下節子が近著『キリスト教の眞實』(ちくま新書)で指摘してゐるやうに、「近代理念である『民主主義』や『自由』や『政教分離』などの概念」は「ヨーロッパといふ特殊社會におけるキリスト教と世俗の權力とのぶつかり合ひとすり合はせによる歴史の中で時間をかけて成立したものである」として、「キリスト教がなければ、『ある普遍的理念に向かつて、平等な個人が自由意思で連帯して進む』などといふ特殊な考へ方が生まれ、確率はきはめて少なかつただらう」。詰り、歐米の自由・民主主義は一朝一夕に出来たものでなく、夏目漱石の講演「現代日本の開化」に出て來る言葉を借りれば、「しなく「内發的」な葛藤を経て來る言葉」を借りれば、「成熟の末に漸く産み出されたものに他ならないが、一方、吾々にとつて

のそれは飽くとも「外發的」な借物、文明開化によつて西歐から採り入れた、いやそれ以上に大東亞戰爭敗戦後に戰勝國アメリカから與へられた、實は體に合ふかどうかも怪しい借着に過ぎないものである。

「我が國は、基本的人權や民主主義といった普遍的價值を重視した外交を行つてきてゐる」とは、外務省のウェブ・サイトに載つてゐる如何にも官儀的な文言だが、昨今識者たちは民主主義を語つて「普遍的價值」といふ事をいとも軽々しく口にし過ぎる。先に引いた竹下の記述にあるとほり、自由も民主主義も元來はヨーロッパといふ「特殊社會」の内部に生じた「特殊な考へ方」だつた譯であり、それが「普遍的價值」へと轉ずるためには何よりも先づキリスト教的普遍主義による徹底的な鍛煉を要した。が、さういふ精神的鍛煉を経た事無い文化圏の人間には、「平等なエフスキーの小説『罪と罰』の主人公、自分は非凡人なるがゆゑに「蝨」の如き金貨の老婆を殺しても赦されると殺人を斷行するラスコリニコフ流の凄まじい倨傲をも完膚無き迄に打ち砕き、萬人をして信服せしめ得るやうな、さういふ絶対的權威が絶対に無ければならぬ。最早言ふ迄もあるまい、それがキリスト教の神(God)なのである。

### 教育随想

日本は今、世界で一番高い評価を受けてゐる。英国のBBC放送が世界の22ヶ國と毎年共同で行つてゐる世論調査の最新版(2012)によれば、世界に最も「良い影響」を与へてゐると評価された國は日本だつた(五月十一日付読売新聞)。

これを更に、日本に對する各別國の評価を見ると、面白いことが判る。参加22ヶ國(米・カナダ・ブラジル・チリ・ペルー・メキシコ・英国・フランス・スペイン・ドイツ・ロシア・ニジェール・ケニア・エジプト・ガナ・インドネシア・オーストラリア・インド・日本・パキスタン・韓国・中国)中、日本に對する評価(「良い影響」を与へてゐると答へた國民の割合)が最も高かつたのはニジェール(80%)、二位はインドネシア(77%)、三位はアメリカ(74%)だつた。この平均点(但し日本を除く)が、日本は一番高かつたのである(58%)。

グラフを見ると一目瞭然だが、圧倒的に多くの國(20ヶ國)

### 世界で一番高い評価と、世界で一番低い自己評価 —データの語る歪な日本

と答へた國民の割合が、自己評価では81%と高いのに、世界評価は41%に過ぎない。韓国も同様で、自己評価は76%と高いのに、世界評価は半分以下の32%だ。かういふのを何と云ふかご存知だろうか。「夜郎自大」と云ふのである。程度の差はあれ、他の國も同様だが、主觀的評価は甘くなるが、客觀的評価は厳しい。これが世界の常識である。

ところが、日本だけが例外なのだ。世界に「良い影響」を与へてゐると答へた國民は、自己評価では43%なのに對し、世界評価は53%と逆転してゐる。日本だけが、自己評価よりも世界評価の方が高いのだ。更に別のデータによれば、自國を誇りに思ふ割合の各國比較では、日本が最低だつた。つまり、日本は世界で一番評価の高い國なのに、自己評価は一番低い國なのだ。かういふのを何と云ふかご存知か。「自虐的」と云ふのである。日本人よ、もつと誇りを持って、と言ひたい。

(勝)

### 教育随想

#### 借着は所詮借着

カトリックの歴史哲學者ソンは『教養と無秩序』者キリストファーストといふ著作で有名な十九世紀英國の文人マシュー・アーノルドを始めとする人文主義者(ヒューマニズム)の

# なぜ日本の教育は間違ふのか

～復興のための教育学～  
森口 朗 著 ◆定価 777円

ゆとり教育の失敗、小1プロブレム、フィンランド幻想など、教育界に横たわる問題点を論じつつ、「眞の教育改革」を説く。併せて「大阪維新の会」の理念も解説。

扶桑社

〒104-0045 東京都港区海岸 1-15-1  
TEL: 0120-29-9625

http://www.fusosya.co.jp

